

## 活躍する同窓生

「娘と英検を受け、2級に合格したんですよ。」一瞬えっと思ったが、気負ったところもなく、さらりと楽しそうに話された顔に、草創期の名学大生が写った。新設大学の1回生が、百年近くの歴史がある、世界にも知れる企業の中で、今の地位を確保するには、並の努力ではなかつたはずだ。

32才で米国防務となり、ラジオも理解できずに始まったが、8年間で生活文化の理解をし、映画を楽しめるまでになった。今日でも、通信教育講座を毎年必ず受け、何か身に付けているとのこと。それは、「国際化が進み、空洞化が始まった今の社会を生き抜くには、何か特技が必要」という言葉につながる。たゆまぬ努力を余暇時間に楽しみながらしているようにうた。



この素地は、学生時代に培われたようだ。卒論指導で、福田学長に、原書を読んで書ける力と言われ、応えてみたそうだ。宗教学では、

「DASEMI」を通して存在即ち、出会いと確実な死への近づきが、一つの真実であることを学び、学長が卒業式で、「GRADUATION」つまり、卒業とは、終りではなく始まりである。天から二粒の雨が地上に落ちる。一つはセントローレン

ス川に、もう一つはミシシッピ川に。つまり、スタートは同じでも、行きつく先には大きな開きがある。」という話などから、「どうせやるなら、人生一生懸命やってやろう。」と心に決めたそうで、会社に入ってから、のフランス思考への切替とて今の柴田氏はあるそうだ。

戦前からの歴史ある建物の中は、32の計算機を大正十四年日本で最初に導入したことを始め、百年の歴史を明るく語る雰囲気を持ち、受付の女性を始め、会う人会う人にこやかで美しかった。



まるで柴田氏の人柄を伝えているようで、ほのぼのとした感じを受けた。案内いただいたノリタケケラフトセンターは、素晴らしい一言であった。一回生が動いていることは、同窓会としても喜ばしいことで、柴田氏の増々のご発展を祈り、期待し訪問を終えた。

第一回卒業生 柴田 貞明

吉株式会社

ノリタケカンパニーリミテッド

経営課本部長

H日 営業部長

## 活躍する同窓生

有松の旧街道の裏手になるが、名鉄電車に面し、有松駅から五分程のところ、立派なお屋敷の一角に大きな黒い倉がある。これが「倉上房」という早川嘉英氏のアトリエである。また、氏が主催する「シボリコミュニティ」と絞りの唯一の世界組織「ワールドシボリネットワーク」の事務局でもある。

草創期の名学大には、顔をよく見ているが、卒業生名簿には、名がない人がしばしばいる。しかし、この人は、名が出ていて驚く人が少なからずいると思う。しかも、今、世界をシボリで飛び回る作家先生と言え、なおさらである。現役時代は、学生自治会の委員長として、「先生の顔も、授業も思い出されなければ……」とにかく活躍した人であった。氏は、「確かに一度退学した。休学を申出たら、休学は授業料が半分いるから、無条件で復学できるようにするので」ということで、当時の家族的な、人間味のあつた思い出話をしてくれた。また、この頃の経験が、翌年に開いた「国際シボリ会議」や、シボリコミュニティ、ワールドシボリネットワークの組織化運営に大いに役立っているとのことだ。

日展、新上芸展に3年出展し、受賞したがあきたらず、絞りのわかる人で、シボリコミュニティを組織、「マイナーな「絞り」を芸術性を高めた、アートとしての「シボリ」を求めている。92年の国際シボリ会議以降、「シボリ」が世界から出てきて、世界ファッションにも影響を及ぼし、「絞りが今、新しい時をつくる」と言う。事実、三宅一生氏も「シボリ」を作品にしている。明日からの東京での展示会の準備をしながら「伝統は、その時代に繁栄したモノだ、だから伝統は、前衛であらねばならない」と熱を込めて語り、「絞りの仲間が点から線になり、今、面への広がりが見えてきた」と。さらに、「シボリ」への情熱を深めていく意気込みを感じた。増々のご活躍に声援を送りたい。

第三回卒業生 早川 嘉英

シボリ作家

職工課主任

シボリコミュニティ事務局長

ワールドシボリネットワーク

事務局長

